

主 題：素晴らしい喜びの知らせ

聖書箇所：ルカの福音書 2章10-11節

テーマ：イエス・キリストが救い主として来られたとはどういうことか？

イエス・キリストの誕生をお祝いするクリスマス！

改めて、皆さんとこうしていろいろな賛美をささげ、またともにみことばを見ることができるこの機会を心から感謝しています。今朝、皆さんとこの時間一緒に考えたいことは、タイトルにもあるように「素晴らしい喜びの知らせ」についてです。そのことをルカの福音書2章、特に10-11節から考えてみたいと思います。この箇所自体は、多くの皆さんにとってなじみのあるクリスマスのストーリーかと思えます。普段、聖書読まない方々でも、もしかしたらこれだけは聞いたことがあると言われる方がおられるかもしれません。一体ここでどのようなことが教えられているのかを見ていく前に、まずみことばをお読みしたいと思いますので、ルカ2章を見てください。特に見るのは10-11節になりますが、内容理解するために1-14節までをお読みします。

ルカ2：1-14

「:1 そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストから出た。:2 これは、クレニオがシリアの総督であったときの最初の住民登録であった。:3 それで、人々はみな、登録のために、それぞれ自分の町に向かって行った。:4 ヨセフもガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。彼はダビデの家系であり血筋でもあったので、:5 身重になっているいなずけの妻マリヤもいっしょに登録するためであった。:6 ところが、彼がそこにいる間に、マリヤは月が満ちて、:7 男子の初子を産んだ。それで、布にくるんで、飼葉おけに寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。:8 さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。:9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた。:10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のための素晴らしい喜びを知らせに来たのです。:11 きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。:12 あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」:13 すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現われて、神を賛美して言った。:14 「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」」

さて、最初にも言いましたが、この箇所は皆さんも聖書の中でよく知っている話の一つだと思います。皇帝アウグストの治世、住民登録をするためにダビデの町ベツレヘムに帰ってきたヨセフとマリヤ。彼らのもとに、かねてから預言されていた救い主イエス・キリストがお生まれになったのです。そして、その知らせを、天使はまず町の近くで羊の群れの番をしていた羊飼いに告げました。あまりにも聞きなじみのある話だからこそ、私たちは、今の内容を何も考えずに当たり前のことのように読んでしまうかもしれません。でも覚えたいことは、ここで天使たちが告げたその知らせというものは、「歴史上最も素晴らしい知らせ」と言っても過言ではないものだということです。そしてイエス・キリストが誕生されたというこの知らせは、今の私たちひとりひとりにとって、皆さんそれぞれに大きく関わる大切なメッセージを教えてくれています。だからこそ、改めてきょうみなさんと一緒に考えたいことは、なぜ、イエス・キリストの誕生がすべての人にとって、いやもっと言えば、私たちひとりひとりにとって素晴らしい喜びの知らせなのか、ということです。ですから、ぜひ自分のこととしてよく考えてみてください。私たちの周りはさまざまな悲しいニュースであふれています。心痛む出来事であふれていま

す。でも、きょう見るこの知らせが、ひとりひとりの心に何よりも大きな喜びをもたらすことを、心から願っています。

さて、もう一度みことばを見てください。10-11節にこのように記されていました。「:10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。:11 きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。…」」ここで皆さんにきょう注目してほしいことは、御使いが伝えたすばらしい知らせというのが、「主キリスト」と呼ばれるお方が「救い主」としてこの世に誕生された、ということです。ダビデの町ベツレヘムにお生まれになったお方は「救い主」でした。でもこれを聞いて、…救い主って、一体どうして救い主が必要なのでしょうか？そもそも救い主というのは、だれかを助け出す存在、危険や困難に陥っている人を救出する存在ですよね。だとしたら、私には関係ありません。私は別に今困っていないし、そのような者は必要ありません。どうしてイエス・キリストが救い主として来られたということがすばらしい喜びの知らせなのでしょうか？このように考えている方がおられるなら、その理由をこれから見ていきます。そして、キリストが救い主として誕生されたその訳を知れば、あなたにとってもこの知らせがすばらしいものだとなるはずですよ。またもっと言えば、イエス・キリストがなぜ救世主として誕生されたのかを知れば、クリスマスが一体何を意味するのか、その本当の意味を知ることにもなります。

### ○救いの必要性：罪と私たち

では、イエス・キリストが救い主として来られたということは、どういうことを意味しているのでしょうか？そのことを理解する上で助けになる箇所が一つあります。同じく、キリストの誕生が描かれているマタイ1:21にこのように記されています。「マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」ここでも同じように、「イエスと名付けられるお方が、民を救う存在として生まれる」と言われていました。でもそれだけではなかったですね。ここにはより具体的にこう記されていました。「イエスと呼ばれる方が罪から救ってくださる方なのだ」と。罪から。つまり救い主として誕生されたイエス・キリストというのは、人々を罪から救い出すために来られた救い主だった、ということです。この「罪」ということばを聞くと、私たちはすぐに、社会の法に触れるようなひどい行いや刑務所に入れられるような犯罪について言われているのではないかと考えますが、聖書が教えている罪とは、そうではありません。聖書が教えている罪とは、「私たちが神様に対して犯す罪のこと」を言います。それだけ聞いてもわからないかもしれません。一体どうということでしょうか？

聖書は、この世界のすべてのものは神様によって創造されたのだ、と教えています。私たちが聖書を開くと、まず初めに記されていることばは、創世記1:1「初めに、神が天と地を創造した。」です。聖書は最初から、神様がこの世界のすべてのものを創造された、と繰り返し教えているのです。振り返ってみてください。私たちはみな、これまでに学校教育を通して“進化論”というものを学んできました。人はみな、何億年もの時を経て、次第に猿から人へと進化してきた、さまざまなものはそのようにして時を経て変わってきたと教えられ、私たちはそれに対して何の疑いを抱くこともなかったことでしょう。どうして何の疑いも抱かなかったかといえば、私たちの周りもみな、すべてのものは進化したと信じているからです。しかし、私たちが聖書を見ると、聖書はそうは教えていません。聖書は、はっきりと、私たちが偶然に進化してできたのではなく、偉大な力を持った神様によって目的を持って造られた、と教えているのです。この世界に住むすべてのもの、地に住むものも、海に住むものも、空に住むものも、また私たちが空を見上げれば、そこにある星や月も、ありとあらゆるものを神様は知恵をもって創造されました。実を言うと、皆さんはそのことをよく知っておられます。なぜなら、私たちが自然界を見渡すと、そこには人の理解を遥かに超えた、私たちが到底理解することができないような知恵に

あふれた驚くべきものがたくさんあることを目にするからです。聖書の中にこのようなことばがあります。ローマ 1 : 19 - 20 「:19 それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。:20 神の、目に見えない本姓、すなわち神の永遠の力と神聖は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」私たちがみことばを見ると、はっきりとこう言われていました。「周りに存在する被造物を見なさい、そうすれば、そこにはこの世界を創造された偉大な神様の力を見て取ることができる、神様の知恵を見て取ることができる、その神様の存在が明らかにされている、それを私たちは見ることができる。」と。このように、聖書は、すべてのものが偶然何の目的もなくできたのではなく、知恵と力を持った創造主なる神様によって、明確な目的を持って造られた、と教えられていたのです。私たちは偶然にできたわけではありません。私たちは目的なく造られたわけではありません。すべてのものが目的を持って造られました。すべてのものがそのような神様によって造られたからこそ、本来であれば、造られた者はみな、この方に仕え、この方に従って生きていくという責任を負っているのです。私たちひとりひとは、私たちが造ってくださった神様を心から愛し、この方のすばらしさをほめたたえるという目的を持って造られました。でも皆さん、実際はどうでしょうか？はたして皆さんは今、創造主であるこのような神様のことを普段の生活で考えるでしょうか？すべてを創造されたこの神様を愛して、この方のために生きていきたいという思いを持って今を生きているでしょうか？

残念ながら私たちはみな、造られた方の目的に従うのではなく、それに背いた歩みをするようになりました。人はみな、神様を求めて生きていくのではなく、自分の望むままに、自分のために生きていたいと思うようになったのです。私たちはみな、心のうちに、私の好きなように生きていたいという思いを持っています。こうして、すべての人は創造主である神様に逆らいました。この方のために生きるのではなく、自分のために生きるようになり、神様に逆らったのです。これを、聖書は「罪」だと教えています。そして、聖書は、この世界に住んでいるすべての者が、罪を持った「罪人」とであると教えるのです。私たちが聖書を見るときに聖書が教えていることは、私たちはみな例外なく罪人だということです。このようにこの世界に住む私たちの姿が描かれています。

ローマ 3 : 10 - 12 には「:10…義人はいない。ひとりもない。:11 悟りのある人はいない。神を求め  
る人はいない。:12 すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行う人は  
いない。ひとりもない。」と書かれています。神様はすべての人が罪深い存在であると明らかにされていました。この箇所を読んで気づきますね。ここでは同じ「いない」と言うことばが6回も繰り返されているのです。義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求めるとは、善を行う人はいない。ひとりもない。いない、いない、いない…言い換えれば、罪を持っていない人は、だれひとりいないということです。私たちは例外なく、ひとりとして罪人でない者はいない、みな罪人だ、と聖書は教えるのです。

ここで「義人はいない」と記されていました。ここで言われていることは、神様の前に正しいと認められる、そのような存在はいないということです。勘違いして欲しくないのは、この「義人はいない」と言ったときに、人がいっさい道徳的に良い行いをすることができない、ということを目指しているわけではありません。私たちが周りを見渡してみれば、さまざまな人たちがほかの人たちにすばらしいことをしている姿を見ることができます。私たちの近い友人たちも、色んなところで困っている人を進んで助けようとしていたり、人から賞賛されるような正しいことをしようとする人たちもたくさんいます。でも覚えておかなければいけないことは、私たちの基準ではなく、神様の基準をもってすべてが判断されるということです。私たちが考えて、これは正しい、これはすばらしい行いだ、ではなく、すべては神様の基準によって判断されるのです。

皆さん、この神様の基準がどのようなものか知っていますか？それは完全なものです。マタイ5：48でこのように言われていました。「だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。」神様が示しておられる基準というのは完全なものでした。いっさいの誤りも、いっさいの間違ひも、いっさいの失敗も、罪もいっさい赦されない完璧なものだったのです。そのような神様の基準を前にしたときに、私たちがどれほど人の前に良いことをしたとしても、この基準を満たすことができる者はいない、ということです。私たちはそれをよく知っています。私たちがどれだけ良い人として生きていこうとしても、それは私たちにはできないのです。正しい人は、だれひとりいないのだと。

また、ここでは「神を求めない人はいない」ともありました。この世界の中には、神様を求める人はいないのであるか、と思う方があられるかもしれません。みことばが教えているのは、生まれながらの人間はだれひとりとして、真の神様を求めようとはしていない、ということです。神様から何かをいただくことを求める人はいられるかもしれません。確かに色々な所にさまざまな宗教に熱心な人々がいます。しかし、この世界を造られた創造主なる神様を求めている人は、ひとりもいないのです。

また、ある人は自分の心を満たす何かを今求めているかもしれません。ある人は自分の望むものを叶えてくれる何かを求めているかもしれません。自分の望むものを手にするためだけに神様を求めている人もいられるかもしれません。でもそのような人の特徴は、どのようなものでしょうか？神様を使って自分の求めるものを欲しいと考える人の特徴は、自分の望むものを手にすることができなければ、神様に対して怒りや不満を口にするのです。自分の求めるものを与えてくれないような神様は私にはいらないと、神様が自分の欲しいものを手にするための手段になっているのです。私たちみなにとって大切なことは、ほかのどのようなものを手にすることよりも、神様ご自身を手にすることが何よりも素晴らしい、ということです。神様を自分のものにする以上最高なことはありません。創造主である神様を知り愛することこそが、私たちの心に一番の喜びをもたらしてくれるものです。でも、生まれながらの人間はそれをしようとはしません。生まれながらの人間は神様を求めようとはしません。どうしてでしょう？それは、罪を持って生まれてきた私たちは、神様を求めることよりも、自分の望むままを生きていくことの方が自分に満足をもたらす、とそう信じているからです。自分自身の心を見てください。私たちの心は、自由を願っていたりします。だれにも指図されたくなくなったり、自分がやりたいことをさせてほしいと望んでいたりするのです。私がどのように生きていくかは私が決めます、あなたの指図は受けたくありません、私がやりたいことをやります…私たちはそのような願いを持っているのです。それが当然のことだと思っているのです。だから、それを邪魔するような人がいれば、その人に対して怒りや不満を抱くのです。そのような願いを持っているからこそ、神様に従っていきたくないなどは当然求めないのです。神様に従っていく？いやいや、自分のやりたいことをやります、やらせてくださいと。

人は神様を求めるのではなく、神様に背を向けました。イザヤ書53：6にはこのように記されています。「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。」ここでよく見てください。「自分かつてな道に向かって行った。」と書いていました。私たちがだれかにそう仕向けられたわけではありません。私たちが自ら神様を拒んで迷い出て、羊のようにさまよい、自分勝手な道へと進んでいったのです。そこには例外は存在しません。私たちは生まれながらに、そのように神様を求めないで歩んでいたのです。だからこそ、先ほど見たローマ3：12の最後に、もう一度こんなことばが出てくるのです。「善を行う人はいない。ひとりもいない。」と。

ですから、みことばは私たちに、ある事実を教えてくれています。それは、私たちは罪によって汚れている存在だということです。だれひとりとして神様の前に正しいと認められる人はいないし、私たちの考えや思いや動機や行動に至るそのすべてにおいて罪に汚染されている、とみことばは教えているのです。今、こう思われている方がおられるかもしれません。「自分はそのようなひどい人間ではありま

せん、なんてひどいこと言うんだ！」と。でも皆さん、私たちが自分自身をよく考えると、私たちは罪にあふれた心を持っているからこそ、それに伴うふるまいを確かにするのです。みことば続けてこのように言います。先ほどのローマ3：12以降の13－18節にはこのように記されています。「：13 彼らののは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く。」「彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり、」  
「：14 彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。」「：15 彼らの足は血を流すのに速く、：16 彼らの道には破壊と悲慘がある。：17 また、彼らは平和の道を知らない。」「：18 彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」」ここで何が言われていたのでしょうか？まず前半部分に書かれていたことは、私たちの「口」が、私たちの「ことば」が抱えている問題が記されていました。「彼ら」ということばを取って、「私」と入れてみてください。「私ののは開いた墓であり、その舌で欺き、そのくちびるの下にはまむしの毒があり、私の口は、のろいと苦さで満ちている。」のです。イエス様もこのようなことを言われていました。マタイ23：27－28に「：27 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいです：28 そのように、おまえたちも外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです。」私たちのことばは、私たちの心の内にあるものを明らかにするものです。だから、どれだけ外側が美しく見えたとしても、その内側が汚れて腐ったものでいっぱいであれば、それが悪いことばとなって出てくるのです。これはもう私が言わなくても皆さんがそのことをよくご存知です。悲しいことに私たちは、私たちのことばによって人を傷つけてしまうことがあります。うわさ話や陰口、悪口そういったもので人々との間に争いを引き起こすことがあります。私たちはことばによって人を悲しませることがあるのです。心が罪によって汚れているから、それがことばとなって現れるのです。

でも、ここでみことばが教えていたことは、「ことば」だけが問題だったのではありません。続けて記されていたのは、私たちの「ふるまい」が抱えている問題でした。私たちのことばだけではなく、日々の私たちのふるまいにもいろいろな問題があるのです。「彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲慘がある。また、彼らは平和の道を知らない。」「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」と。心に罪の問題を抱えていれば、ことばだけではなく、私たちのふるまいにもその影響は必ず現れます。たとえば、問題が起これば、私たちは暴力によってそれを解決しようとする場合があります。そのようなものを目にすることがあります。自分の願っているものが叶えられなかった時に、それを押し通そうとする結果、人と人との間に争いが生じることがあります。そして、そのことがきっかけで殺人が起こることもあります。ここに記されていたように、そのような者たちが抱えている何よりも大きな問題は、神様に対する恐れを抱こうとしない、ということです。「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」と。神様の存在なんて自分にはどうでもいいと思っているのです。生まれながらの人間は神様を求めようとはしません。それは、神様に対する恐れがないからです。この方に従っていきたいとの思いを持っていないのです。皆さん、これが、聖書が教えている私たちの姿です。

私たちはほかの人とよく比べることをします。あの人よりは自分のほうがマシだ、あの人の方が自分よりひどいことをしていると。そのようにして人と比べることによって、私たちは心の内で、自分はそのようにひどい人間ではない、自分は大丈夫だ、と安心させようとするのです。しかし覚えておかなければいけないことは、神様の前には私たちはみな等しく罪人であるということです。どうしてかという、それは、この創造主、世界を造られ私たちを造られた神様は、私たちのふるまいだけではなく、私たちのことばだけではなく、私たちの心の内を見られるお方だからです。私たちは色んな方法で人の目を欺くことができます。でも神様の前には、どれだけ取り繕うとも、ごまかし、隠し通せるものではありません。神様の前には、どのようなに小さな罪も、罪です。そしてこの聖く、完全なお方の前には、すべての者が“有罪”と認められるのです。だからもし、皆さんの中で、今ほかの人のことを考えていてほかの人を指して、あの人のがやったことは私には受け入れられない、あの方は自分よりもひどい人間

だと考えている方があれば、よく覚えなさいといけません。神様の前には、みな等しく罪人だということです。ほかの人のことを気にすることよりも、まず自分の状態をよく考えなければいけません。

さて、ここまで聞いてきて、…聖書がいくら自分のことを罪人だと言っても、そんなものは私には関係ない、そんなことを気にする必要は私にはない、そう言われるかもしれないけど私には関係のない話だ…とこのように考えておられるなら、そうではないということをよく考えてください。なぜなら、この世界を創造された完全な神様は、罪を憎まれているお方です。私たちがどう感じるかが問題なのではありません。この方は完全な神様だからこそ、罪を絶対にそのままにされることはありません。必ず正しいさばきを与えられます。この神様はご自身が正しい方であるがゆえに、罪をそのまま見て見ぬふりすることを決してされないので。神様は罪に対して何も思っていない方ではありません。私たちが今それを見てないからといって神様が何もしないわけではありません。このようにみことばも言っています。詩篇7：11「神は正しい審判者。日々、怒る神。」と。神様は今もお、罪に対して怒っておられるのです。だからこそ、すべてを創造された創造主に逆らって、この聖い方の前に罪を犯すそのような私たちは、例外なく、その歩みにふさわしく罰せられるということです。だれひとりとして、そのさばきに対して口答えすることはできません。私たちは普段、色々な面で言い訳をすることがあります。だれかから間違いや過ちを指摘されれば、すぐに言い訳して逃げようとしたり、言い訳することで自分の身を守ろうとします。自分の正しさを証明しようとしたり、自分を責める者に対しては、「なんだ！」と言って怒りを示したり、逆に周りの人を非難するかもしれません。私たちはみな、自分が間違っているということを認めたくないのです。でも、すべてをご存知の神様が、私たちに対して、「あなたは有罪なのですよ！」とそう突きつけるときに、だれひとりとしてそれに対して何もいうことはできないということです。神様はすべての者をご存知です。皆さんの心の中にあるものをすべてご存知です。この神様の正しいさばきの前には、私たちはひとりとして言い逃れができる者はいません。みことばにもあります。ローマ3：19「…それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服する」のだと。

そして皆さん、この厳しい事実を覚えるときに、私たちには大きな大きな問題があります。それはこんな状態にある自分自身を、自分の行いで救うことはだれもできないということです。私たちは罪人として今を生き、そして神様のさばきがあります。でも、私たちはだれひとりとして自分の力でこの罪の問題を解決することができないのです。なぜだと思えます？それは神様の求める基準が完全なものだからです。どれだけ私たちが良い行いをして、どれだけ正しいことをしたとしても、だれもその基準を満たすことができる人はいないので。だから私たちが自分の罪を見るときに、私たちはそこに神様のさばきがあることを見ます。そのさばきを見るときに、私たちが自分自身のうちに解決策を見出そうとしても、そこには何もないので。私たちがみことばを見て言えるのは、私たちには何もできない、ということです。だから罪を見るときに、私たちのうちにはいっさいの希望などありませんでした。みな私たちは生まれながらに罪を持っているので、どうあがいたとしても、神様の完全な基準を満たすことができないからこそ、私たちはみな永遠のさばきを地獄で受ける、そのような存在だったのです。何もできないと。

### ○救いの重要性：救い主と私たち

では、私たちはもう何の希望もなくこれで終わりなののでしょうか？そうではないのです。たった一つだけその問題を解決するものがありました。それこそが、イエス・キリストだったのです。イエス・キリストが救い主として来られた理由は、その問題を解決するためでした。私たちにはどうしようもなかったこの罪の問題。イエス・キリストは人々を罪から救うために来られました。この方のうちには力があつたのです。もう一度ルカ2：10-11に戻ってみてください。そして今まで聞いてきたことを考えながらよくこれを見てください。このように書かれていました。「10 御使いは彼らに言った。「恐れ

ることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。：11 きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」イエス・キリストは救い主として、ダビデの町ベツレヘムの馬小屋でお生まれになりました。神の御子が、人としてこの地上に来られたのです。このことに関して、ヨハネもこのようにイエス様の姿を表現しています。ヨハネ1：1、14に「：1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。…：14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」とあります。この世界に誕生された救い主イエス・キリストは、完全な人であり、また完全な神様である、そのようなお方でした。だからこそ、その生涯において一度も罪を犯すことがなかったのです。キリストは神であるからこそ、罪を犯すことはなく、その歩みの中に一つの誤りも見出されることはありませんでした。この方はすべてにおいて私たちとは違って、すべてにおいて完璧な生涯を送られたのです。確実に、罪に汚れた私たちとは異なる存在でした。この方は罪を犯されることがないお方でした。でも、皆さんも聞かれたことがあるように、キリストはこの地上での最後に驚くべきことを成し遂げられたのです。そうです、イエス様は十字架にかかって苦しみ死なれたのです。この方は何の間違ひも罪も犯されないお方でした。だから、死ぬ必要もなければ、苦しみを受けるような必要もありませんでした。ましてや十字架につけられる必要など到底なかったのです。

考えてみてください。十字架刑は、かつてローマ帝国において、ローマ帝国に対してテロや謀反を企てるような最も卑劣な犯罪者への処刑方法として用いられていたものでした。最悪の罪人が受ける刑だったのです。両手首と足首を釘で十字架に打ち付けられて、その者はすぐに死ぬことはできず、痛みや傷にもだえ苦しみながら数日を十字架の上で過ごすのです。そして時間が経つにつれて増し加わる痛みや疲労によって自分で自分のからだを支えることができなくなり、呼吸困難に陥って死に至るのです。そのあまりの痛みと苦しみのゆえに多くの受刑者は発狂してしまう、そのようなものでした。今でも多くの医者たちが、歴史上行われた死刑方法の中で十字架刑こそが最も残酷なものであったと考えています。そのような想像を絶するほどの苦しく残酷な十字架に、罪のないイエス・キリストが自ら進んでかかって死なれたのです。

皆さん考えてみてください。一体どうしてイエス様は十字架にかかれたのでしょうか？それは私たちの持っているその罪が、まさにそれに値するものだからです。思い返してみてください。私たちを造られた創造主なる神様は、ご自身の正しさゆえに罪を決してそのままに見過ごすことができないお方でした。この方は、ご自身が義なるお方、正しいお方であるからこそ、間違ひをよしとして見なかつたことにすることは絶対にできないのです。聖く完全な、罪に対して怒りを燃やされるそのような神様は、必ず罪を罰しなければならぬのです。だからこそ、私たちはみな罪人であるがゆえに、この方のさばきをだれひとりとして逃れることはできないのです。罪は私たちにはどうすることもできない問題だったのです。この問題を解決するためには、私たちではないほかのだれかが、私たちと違って罪の一切ない完全な歩みをするだれかが、私たちの代わりになって死んでくださることが必要だったのです。そしてそれが、救い主として来られた神の神子イエス・キリストでした。この方は人として来られ、神として来られたからこそ、罪を一切犯すことがなく、私たちの身代わりになって十字架にかかることができました。これが、十字架が成し遂げたものだったのです。聖書にもこのように記されています。I ペテロ2：22-24に「：22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。：23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。：24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」イエス・キリストは私たちに代わって十字架にかかり、その血を流してくださいました。本来であれば、私たちひとりひ

とりが受けるべきその罪の罰をキリストは背負って、罪に対して神様が燃えるほど怒っておられるその怒りに耐え忍ばれたのです。神の怒りは必ず罪に対して私たちの上に注がれなければいけないものでした。しかしその怒りを、キリストが十字架の上で、私たちに代わってなだめてくださったのです。この方が、私たちの代わりに死んでくださったからこそ、その犠牲を通して、神様は私たちに罪の赦しを与えることができました。この方を通して私たちが義と、正しいと認めることができたのです。イエス・キリストの十字架こそが、私たちにはどうすることもできなかった罪の問題を解決することができる唯一のものでした。だから、イエス・キリストは人として来られ、神として来られ、十字架にかかる必要があったのです。これが私たちに対して神様が示してくださった偉大な愛でした。

ここで私たちがよく考えないといけないことは、この愛を示してくださったのはほかのだれでもない神様だったということです。私たちが神様の前に何か喜ばれること、すばらしいことをしたからその応答として、神様が私たちに十字架を与えてくださったのではありません。私たちが神様を愛したから、その応答として、神様が私たちに愛を示してくださったのではありません。今まで見てきたように、私たちはみな神様を忘れて自分勝手な道を進み、神様の前に罪を犯して逆らっていたその時に、私たちが、神様なんていない、私は自分のしたいことをしたいとそのように逆らって歩んでいたその時に、神様がまず私たちを愛し、救いを備えてくださったのです。私たちにはできないことをこの方は成してくださいました。ローマ5：6-9に「:6 私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。:7 正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。:9 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」罪に汚れたこんな私たちの代わりにイエス・キリストが死んでくださったからこそ、私たちの罪の罰は取り除かれ、赦しを与えられました。この方の愛とあわれみによって、私たちは神の怒りから救われ、義とされたのです。私たちが何かをしたわけではありません。私たちがそもそも何かをできたわけでもありません。しかし、神様が私たちを愛してくださったからこそ、このような救いの御わざを達成されたのです。

また同時に、この方は十字架の上で死んで終わりではありませんでした。十字架で死んで亡くなって私たちと同じように墓に葬られたままではなかったのです。亡くなる前に約束されていたとおりに、三日目に墓からよみがえり、ご自身が死に勝る力を持った神であることを証明し、そして天に上られました。この方がもし復活されていなかったとすれば、この方は、死に対して勝利することができない私たちと何も変わらない存在だということになります。でもこの方は神であるからこそ、死に勝利して復活されたのです。この方は人として来られたお方であり、力ある神の御子でした。だからこそ、人には絶対にできないことを成し遂げられたのです。これがイエス・キリストがこの地上にこられた理由でした。これが、私たちがイエス・キリストの誕生をお祝いする理由です。なぜ私たちは祝うのか、なぜキリストの誕生がすばらしい知らせなのか、それは、あなたにはどうすることもできなかったその罪の問題を解決してくださった、そのようなすばらしい救い主がこの世に来てくださったからでした。

そうであるなら、皆さんはこれを聞いてどうでしょう？きょうは、私たちが抱えている罪の問題について、その罪に対する神様の怒り、神様のさばきについて、罪に対するイエス・キリストにある赦しをともに見てきました。聖書の教えるこのすばらしい知らせに対して、あなた自身はどのように応答されるでしょう？もし、まだこの救いを自分のものとされていない方がおられるなら、まだこの主を知らない方がおられるのであれば、あなたにみことばが求めていることは、このイエス・キリストの前にへりくだって、この方を自分の救い主として信じ受け入れることです。イエス・キリストが自分の代わりに死んでくださったと。本来なら、自分自身が受けるべき罪の罰を、この方がすべて負ってくださっ

た、この方のうちにしか罪の赦しはないと。この方のうちにのみ希望があるのだと。イエス・キリストはよみがえられた偉大な神であり、救い主なのだ信じ受け入れ、これまでに犯してきた自分自身の罪を悔い改めることです。

私たちはどのような歩みをしてきたのか、神様の前にどのような罪を犯してきたのか、罪人なのかということを見ました。罪を悔い改めて、このすばらしい救い主にある赦しを求めることです。そしてこのイエス・キリストを自分の主として、自分のすべてをささげて従っていくことです。皆さん、何度も言いますが、私たちはだれも自分自身を救うことのできる者はいません。どれだけ良い行いをしたとしても、どれだけ人の目にはよく見えるものだったとしても、自らを救うことは決してできません。だからこそ、唯一救いを与えることのできるイエス・キリストに自分の身をゆだねて、すべてをささげて生きていくことです。だれにも明日のことは分かりません。次の瞬間に何が起こるのかは私たちにはわかりません。でもわかっているのは、私たちは必ずこの世界を創造された聖く完全な神様の前に立つ日がやってくる、ということです。その日は必ずやってきます。その日にいくら自分が間違っていたと後悔しても、そこではもう手遅れになります。ですから、どうかこのクリスマスの時に、このイエス・キリストのうちにあるその救いを自分のものとして求めてください。神様は、心碎かれて、ご自分のもとに来る者を喜んで赦してくださる、とそのような約束を与えてくださっています。この救い主を心から信じて、この方のためにすべてをささげて生きる人生をきょうから始めてください。私たちは色んなところに幸いや満足を見出そうとして今を生きているかもしれません。でもイエス・キリストにこそ、あなたの心を満たす本当の喜びがあります。その喜びを、そのすばらしさをきょう知ってください。

またもうすでにイエス・キリストを信じてこの方を愛する者として、今歩まれている皆さん。私たちは覚え続けることです。神様の前に私たちがどのような存在であったのか、どれほど大きな愛を、どれほど大きな赦しをこの方が私たちに与えてくださったのかを、決して、決して忘れることのないように。私たちの中で救いに値する者はひとりもいません。私たちは何もできませんでした。滅びだけがふさわしい存在でした。しかし、あわれみ豊かな神様が私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪の中に死んでいた私たちを、その罪から救い出してくださいました。皆さん、私たちにキリストしかありません。そして今も、私たちはこのキリストによって生かされているのです。私たちのうちには希望はありません。でもこの方に希望があります。この方の十字架をいつも覚え、この方が復活され、また帰って来られることを覚えて歩み続けることです。

「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」この知らせは皆さんの心に最高の喜びをもたらすものでしょうか？イエス・キリストは私たちを罪から救うために来られた救い主でした。この方をほめたたえ、この方に感謝を持って仕える者としてますます歩んでいきましょう。